京城日報
夕刊
編輯發行人 印刷人 兒島三之介 吉田祐一郎(?)
京城府太平通一丁目 發行所 合資會社京城日報社
七月十二日（日）

光る商業美術寫眞

全朝鮮寫眞聯盟 朝鮮最初の試み

第三部 サツポロビール

（上右）第一席 品川通夫氏作（咸興寫眞俱樂部）（上左）第二席 藤井雅男氏作（本町光畫研究會）（下右）第三席 河野琴舟氏作（仁川光影會）（下中）第四席 三井俊雄氏作（鎭南浦カメラ俱樂部）（下左）第五席 上本龍三氏作（鎭江俱樂部）

愚禿頭巾（ぐとくづきん）（180）

東國篇

吉川英治作　山村耕花畫

河和田の平次（六）

「この阿女ッ」

不意だつた。

ぐわんと、鼓膜がやぶれる程、お吉の耳朶を撲りつけて呶鳴つた聲がある。

廿七、八の壯んな筋肉を持つてゐる男だつた。職人扇帽子を後へ落し、仕事着の片肌を脱いでゐて、汗の光つてゐる毛穴には、鉋屑がたかつてゐた。

お吉の亭主の平次郎なのである

お吉は、隼に見込まれた小鳥のやうに、よろめきながら、網戸きの仲間の蔭のかげにかくれ、

「あつ——爺さん」

「謝まつて下さいつ、爺さん、良人のひとへ」

と、もう泣き聲だつた。

「うぬ」

と、平次郎は、女房のそばへ寄つて來た。

「畜生しめが」

と、平次郎の手は、すばやくお吉の襟がみをつかんでゐた。そして、大地を引きずり廻しながら、

「云つても云つても、この阿女は、碌でもねえ事をしやがつて、おれのいひつけを、何だと思つてゐやがる」

足を上げて蹴飛ばした。

「すみません！もう決して、こゝへは參りません」

「こゝばかりぢやねえ、おれの嫌ひを承知のくせに、亭主のいやがる事を、うぬは、故意にするのだッ。さッ、けふはもう勘辨できねえからさう思へ」

腰帯から鑿を扱いて、右の手にひらめかせた。

「あれッ、助けてッ——」

お吉は逃げ廻つた。

人々も、うろたへて

「あぶないッ、平次さん、そ、そんな亂暴な事をしないでも」

「何を云やがる」

平次は、眼をつりあげて、自分を遮る者を睨めまはし

「おれの女房を、おれが折檻するのだ、自體、てめえ達が、盗賊なお手本を出すからよくねえ」

さういつて

「やいッ」

と又、お吉の方へ、怖しい形相を向け直して喚くのだつた。

「あれ程、いつても懲しても、また家を留守にしやがつて、こんな所へ來てよくも結構な眞似をしてゐやがるな。……はゝア分つたな、この豐前屋にや、和介の野郎が仕事に來てゐるので、てめえは、僞りに事よせて、和介の顔を見に來やがるのだらう。……いや、さうだ、さうに違へねえ」

「ま……何をお前さん」

「いゝや、てめえが、和介の奴に妙な素振りを見せてゐる事は、おらあとうに知つてゐるんだ。さもなくて、べら棒め、その日稼しの貧乏人が、駄賃も出ねえタダ働きを何でするッ」

「……」

「なぜその間に、亭主の晩の酒代の足しにでもなるやうに、魚でも漁るとか、繩でも綯ふとか、他人仕事の手傳でもするとか、小役ひの多足になる事を考へねえのだ。——この淫賣者め」

鑿を振りかざしたので、お吉は必死にもがいて、平次郎を突きとばした。

「こいつ！」

一度、よろめいて、膝をつきかけた平次郎は、起ち上つて、女房の襟髪を後からつかんだ」

庭球界の最高峰 晴れの大會開く

集るは各地選り抜きの名手

けふ京城運動場の壯觀

輕快な庭球界の最高峰——古き歴史を誇る全鮮男子庭球選手權大會はけふ十二日午前大に擧行した、定刻嚴肅なる國旗に續く本社主催・第十三回全鮮男子庭球選手權大會は前十時から京城運動場コートで盛大な入場式を行ひ前年度本大會選手權保持者中央代表（飯塚御堂、權燉仁組）の優勝カップ返還式、終つて安井京畿道知事の挨拶に對し飯塚御堂選手の宣誓あり、井上庭球聯盟會長の見事な始球式によつて晴れの大試合は開始された

（寫眞說明）晴れの第十三回全鮮男子庭球選手權大會＝（上）は火蓋を切つた第一試合（下）は入場式（中）は井上庭球聯盟會長の鮮やかな始球式＝

オリンピック開催地の決定

卅一日にベルリンで 形勢東京、ヘ市互角

【ベルリン十日同盟】第十二回國際オリンピック開催地決定問題は議事豫定では來る三十日行はれることになつたが、右につきレワルド博士の觀測に依れば東京、ヘルシンク、ロンドンの各地の爭ひの結果、この問題は三十一日に持ち越されることとなるのではあるまいかと見られる、一方各國委員のベルリン乘込みは遲くも二十七日頃となるらしく、現在の出席申込みは五十三人あるが出席數は四十五名内外と見られる、尚ドイツ委員の觀測に依ると、次回大會開催地は東京、ヘルシンクが互に二十票、ロンドンの得票は恐らく五票位ではないかと見てゐる

我水球代表軍

【ベルリン十一日同盟】我が水球代表軍は十日ベルギーと同等の實力を有すると稱せられてゐるシユパンダムチームと對戰前半一點を先取しリードしたが、後半シユパンダムの猛攻に五點を許しこの間一點を加へたのみで五對二で敗退した

シユパンダム 五〇—一一 日本

淺野奬學資金

今年は二十名 全部で卅八名になる

京城大和町淺野太三郎氏の寄志金十萬圓を基金とせる淺野育英會は昭和四年一月の創立で前途有爲の靑年學徒の學資に給費すること既に二〇二名、中學、專門、大學を卒業せるものも百六十四名の多きに達し、現に十八名の給費をなしてゐるが、本年度の給費申込者三十二名の人選に就き十日午後四時同所で同商評議會を開催、愼重詮議の結果二十名を選定、給費することゝなり、合せて給費生は全部で三十八名となる譯である

明水湖の鮎釣り

擬似針の鮎釣り大會を十二日午前十時から明水湖で催した、會員三十名、名だたる太公望揃ひ（寫眞は同釣り會）

ラヂオ

今晩

六時偉人物語（東）東京放送　藝術研究會▲七時三〇分講演（東）早坂一郎▲八時ラヂオドラマ（東）東山千榮子外▲八時五〇分謠曲觀世正風▲九時經濟市況（名）（岐阜市金華山麓長良河畔より中繼）▲一〇時鮮語交換放送雜貨子外

英帝御成婚か

丁抹の姫君

【ロンドン十一日同盟】英帝エドワード八世陛下は御年既に四十二に近く、未だ獨身に亘らせられるため、晴れの戴冠式を一年後に控へ國民擧げて皇后陛下の冊立を要望してゐるが、歐洲宮廷界に綺羅星の如く輝く姫君のうち、デンマーク皇帝クリスチヤン十世の第二皇弟ハラルド、クリスチヤン殿下の第三王女アレクサンドリーヌ、ルイズ姫が最も有力な候補者として白羽の矢が立てられてゐると云はれてゐる、姫は芳紀まさに二十二歳ヨーロッパ社交界に才色兼備の誉高い御方で、エドワード八世の御配偶として誠に申分ないと云はれる、只問題は當のエドワード八世の心持ち如何で、果して陛下が年來の獨身主義を御清算、御結婚生活に御轉向あそばされるか、否か依然疑問視されてゐる、勿論宮廷當局は御成婚に關する噂一切を頭から否定してゐるが、皇帝側近の人々は戴冠式以前に皇帝が御成婚式を擧げられる事は疑ひないと漏らしてゐる

七月上旬の氣象

本旬を通じて高氣壓は小笠原附近本邦東方海上及オホツク海に滯留し、低氣壓は度々揚子江流域又は北支那に發生して徐々に東又は北東進し氣壓配置は漸く本格的の梅雨となつた、從つて内地は連日降雨し、九州では水害を蒙つた所もあつた、朝鮮も南部は此影響で旬の半以上は雨、降水量も南岸及江陵附近では百粍を超え、此方面は聊か降水過多の感がある、中部以北も概ね陰鬱で時々雨、旬末には沿岸では連日濃霧さへ發生したが、降水量は數十粍に過ぎず、また〳〵水不足である殊に西鮮では十粍にも充たぬ所が多くあつて引續いた降水不足に旱魃を憂慮されてゐる

斯の如く陰鬱な日が續いた爲日照は二三十パーセントの所が大部分で氣溫昇らず平均氣溫は仁川及平壤を除いて平年より一、二度、殊に江陵では三度五も低く極めて冷涼であつた

後藤又兵衞 (61)

大島伯鶴 演　中江正美 畫

口から泡を

又兵衞は、一々發見をしてから、安藝守の家臣をずつと眺めまはして、

『如何でござる、各々！これでも馳走の中に毒物が這入つて居ると申されるか？モシ此中に毒があつたら、斯く申す又兵衞は、無事に居られぬ筈……』

と、斯う言つて、なほも其處にあつた藷麥饅頭の一つを口に入れたが、酒を飲んだあとで甘味を食べ、また酒を飲む。あまり好い心地のものではない。

安藝守の家臣は、これを見て、

『イヤ後藤殿、吾々共、決してお疑ひ申したわけでは御座らん』

一人が口を開いたから堪らない、

『後藤氏、拙者も一獻頂戴致す』

『某も。』

『イヤ、手前も……』

と、盃を手にして飲み始める。

スルと甘黨の者は、

『某は、空也の最中が大好物……』

『手前は藷麥饅頭を』

などと、食べ始めた。又兵衞は一座の人々を見廻して、

『イヤ、各々が、さうして召上つて下されば、執持役の吾々の面目此上もない。さア、齋木どのお酌仕らう。』

『これは忝い、イヤ、大分醉顏致して……』

『湯本どの、一獻如何？この大盃にて一ツ！』

又兵衞が三合入りの大盃を執つて出すと、

『これは、これは……チト頂戴なく』

と、受けて小姓の酌でグーツと飲み乾せば、又兵衞は、手を拍つて、

『それ、肴を、もう一つ』

仰る所へ、小姓が入り替り立ち替り、長柄の銚子を運んでくる。最初のうちは何事もなかつたが、段々酒が進むに從ひ、後から運んで來た銚子の中には毒が入つてゐたと見えて、最初に盃を受けた齋木重兵衞が、

『ウ、ウ、これは——』

と、言ふと、眼を据ゑて、柱に凭りかゝり、たら〳〵よだれを流しはじめた。スルと、續いて、湯本甚造も、同じやうな狀態に陷り

『ウム、ウ、ムン』

と、唸り出した。酒を飲まぬ者は饅子を食べ、また膳部の上の馳走を食べてゐたが、この人々もウン、ウ、ムと唸りながら、口から泡を吹き始めた。

と、言つたが、又兵衞は肯き入れず、

『否。お疑ひになつて居る、それが證據には、箸を執らず、また、一トロも召上らぬではないか……』

と、疑ひを懸けられた吾々共、一旦疑ひを懸けられた以上は、このまゝ膳部を退げるわけにはまゐらん、依つて、これにて腹を切る。それ共盃をお受け下さるか』

と、手詰めの談判。安藝守の家臣は互ひに面を見合せてゐたが、中には酒が好きで、先刻から咽喉を鳴らしてゐた者もあつた。

ソコで又兵衞が意見をした上は最早大丈夫であらうと、齋木重兵衞と云ふ者が、進み出て、

『イヤ後藤どの、何共恐れ入つた！デハ齋木重兵衞がお相手仕る、一獻頂戴致す……』

と、盃を手にしたから、又兵衞は、喜悦して、

『これは、忝い。一人にても盃をお受け下されば、饗應役たる吾々の役目も濟む、然らば、お酌致さう……』

と、彼々銚子の酒を注ぐ、さア

本社主催 第十三回

全鮮男子庭球選手權大會

"半島庭球"の最高榮譽 三度(熊埜御堂 權輻仁組)に輝く

各地から選りすぐつた名手

きのふ京城で空前の大試合

全日本軟式庭球界の最高峰である本社主催、第十三回全鮮軟式庭球選手權大會は、カラリと晴れた京日日和の十二日、午前九時半から京城運動場コートで擧行した

定刻 前年度選手權保持者熊埜御堂、權福仁組を先頭に中央、北鮮、湖南、東鮮、西鮮、南鮮中鮮、國境の順序で堂々と入場式を行ひ、熊埜御堂、權兩選手の手で厳かにセンターボール高く國旗を掲揚

次いで安井京畿道知事から

「本大會も回を重ねる毎に中央地方を問はず、技術に精神方面にすぐれた選手が多數參加されたことは誠にうれしい。正直で明朗な鋼正運動精神を發揚されんことを切望する」

と選手に激勵の言葉を與へ、これに對し熊埜御堂選手は選手を代表して

『あくまでも運動精神に則つて正々堂々と戰ひます』

宣誓 を行ひ、終つていよいよ南鮮推薦國境代表はコートに起つた、かくて井上朝鮮軟式庭球聯盟會長(前遞信局長)の鮮かな始球式によつて戰の幕は切つて落された、スタンドには炎天にもめげず千名の觀衆がつめかけファインプレイを追つて限りない拍手を贈つた

郷土 の名譽と必勝をかけた選手の戰績は次の如くである

第一回戰

南鮮推薦(黄河秀 朴點守) — 國境代表(文在明 獨孤敬植)

8—4
4—6
4—1
6—8
5—7
1—4
2—4

國境代表のサーブに始り、一ゲーム先取し、そのまゝ押切ると思つたが、黄河秀選手のバック、ストロークは國境軍の眼前を封じ込み、接戰の後南鮮推薦組四——二で勝つ

選手權保持者(熊埜御堂 權輻仁) — 中鮮代表(張在伯 柳東蕃)

0—4
1—4
1—4
2—4
0—4

前年度優勝者であり、全日本選手權保持者である熊埜御堂權組依然強く、中鮮代表の張在伯選手も猛球を連發したが、權選手得意のバック・ボーレイで痛打され四——〇で中鮮代表恨みをのむ

中央推薦(殷秉律 渡邊) — 西鮮代表(金鍾楠 李鍾郁)

1—4
3—5
0—4
4—1
4—2
5—3
3—5
0—4
3—5

中央の殷、渡邊組のコンビ好くする〳〵と三ゲームを先取、あつ氣ない試合に終るかと思つたが、平壤府廳のホープ金選手俄然調子恢復、機關銃の樣な猛球を浴びせかけ、ゲームは三對三とエキサイトし、場内の觀衆は總立ちとなつて兩派に別れて聲援したが、老功な渡邊選手輕快なモーションで味方をカバーして五對三で辛勝す

東鮮代表(朴用遵 劉在燮) — 南鮮代表(朴正烈 野部)

4—6
7—9
2—4
2—4
0—4

兩軍とも新進氣鋭の花形、殊に東鮮地方は本大會より新に出場したダーク・ホースだ、試合は最初から前衞戰となつたが南鮮の前衞野部選手ボーレイにレシーブにポイントを摑み、そのまゝ四——〇で押し切つて勝つ

中央代表(洪承杰 李鳳基) — 西鮮推薦(崔田 小山)

5—3
2—4
1—4
4—2
2—4
4—2
1—4
4—6
3—5

中央の洪承杰選手は昭和八年度のそれ〳〵本大會選手權を獲得した超弩級の名後衞で、殊に西鮮の崔田選手は昭和七年權を握つた日本庭球界の覇者である、ゲームは豫想の如く後衞戰となり、崔田選手が老練なロッブで攻れば、洪選手は強腕を利用して取つて置きの猛球を交せたクロス打ちで應酬、試合は一進一退となり、後半戰に入つて崔田選手のダブル・ホールと前衞小山選手が擦りに下り過ぎて西鮮軍の陣營は亂れ、この隙を突いて李選手が活躍、結局前衞の差で中央代表が勝つたが、いつに變らぬ崔田選手のうま味のあるプレイにスタンドは惜しみない拍手を贈つた

中央推薦(黄菲 淺野) — 湖南推薦(崔東根 孫京燮)

3—5
4—6
2—4
0—4
0—4

湖南の崔選手トップ打ちで淺野選手を攻めたが、後衞黄選手の救援ストロークが湖南陣營に爆破、續く淺野選手の鮮かなボーレイに手の出し樣がなく四—零で中央勝つ

第二回戰

南鮮推薦(黄河秀 朴點守) — 中央推薦(洪承武 朴龍善)

4—1
2—5
3—5
7—4
0—4
0—4
2—4

第一回戰に國境代表を破つた黄、朴組は第二回戰で全朝鮮庭球界の花形殖銀の大將組洪、朴組と對戰、兩軍とも互に腕の程を知つてゐるだけ大事をとり、自重したラリーを展開、後衞戰は南鮮軍が積極的に出で、得點を續けたが、後半で朴龍善選手の十文字に動くモーションに幻惑されかつては鐵道軍の大將組の後衞として勇名を鳴した黄選手の奮鬪も空しく勝を中央軍に讓る

中央推薦(崔永生 鄭士運) — 湖南代表(金東燮 趙龍燮)

4—2
2—4
2—4
7—5
2—4
6—4
2—4
3—5
3—5

中央の前衞鄭選手日頃の腕を見せず、湖南の後衞金選手のストロークに押され勝ちで兩軍とも亂戰となつたが、崔選手好く追擊を避け、辛勝す、破れたとは云へ湖南代表の鬪志あるプレイシングは場内に光つてゐた

北鮮代表(柴田 加藤) — 西鮮推薦(金應河 李鍾澤)

1—4
7—9
0—4
2—4
0—4

西鮮軍の前衞李選手は昭和八年の本大會に優勝した古豪、北鮮軍は北鐵チームの强豪で、兩軍とも好く打ち合つたが前衞の差で北鮮軍破れる

第三回戰

選手權保持者(熊埜御堂 權福仁) — 西鮮推薦(金應河 李鍾澤)

2—4
1—4
0—4
2—4
0—4

北鮮代表加藤、柴田組を倒して第三回戰まで進んだ西鮮組も、熊埜御堂選手の正確なサーブと急所を突くストロークに陣營は亂れ、金、李組の奮鬪も空しく四—零で敗れた熊埜御堂、權組依然強しの聲が場内に起つた

中央推薦(洪承武 朴龍善) — 同(崔永生 鄭士運)

4—1
3—5
6—6
2—4
2—4
2—4
2—4

中央同志の試合であるが、本大會が伊勢神宮の全國府縣大會豫選を兼ねてゐるだけ兩組とも鬪志滿々、互に相手の缺點や長所を知つてゐるだけゲームは白熱し、前衞戰となり、鄭選手が猛烈なスマッシングを打ち込めば朴選手ダイレクトで返す等美技續出結局朴組の猛鬪が勝因を作り四——二の接戰の後崔、鄭組が覇權を奪つた

中央推薦(殷秉律 渡邊) — 南鮮代表(朴正烈 野部)

4—2
2—4
4—0
5—3
3—5
2—4
4—6
2—4
3—5

地方選手團總崩れの時、南鮮代表の朴、野部組殷軍豫戰、殷、渡邊組をゲーム三——〇まで追ひ詰め、これを破つて準決勝戰に臨むかと思はれたが後半戰に入るや殷選手のトップ打が決まつてグリ〳〵と盛り返し五——三の大接戰で辛勝したが朴、野部組の活動は稱讚に値するものがあつた

中央代表(洪承杰 李鳳基) — 中央推薦(黄菲 淺野)

2—4
2—4
0—4
2—4
0—4

中央庭球大會で宮崎、孫組及び京城鐵道軍等の强豪を抑へ、破竹の勢ひで中央代表權を握つた洪、李組と、一方は專賣チームの大將として京城實業リーグ戰第一位となつた黄、淺野組の對戰だ、ゲームはエキサイトを豫想されたが實戰となるや洪承杰選手の鬪志は燎原の火の如く燃えさかつて、黄、淺野組の立ち直る隙を與へずストレートで勝ち、數千百名の觀衆は悄然たる態であつた

觀衆が拍手を贈る 美技・名フレー

午後に入り興味深し

大會 は午後に入つてます〳〵白熱、觀衆も酷熱を征服して球場へ〳〵と蝟集、その數千五百名の多數に上り、婦人のファンも多數詰めかけ、大會の終了まで熱心に觀戰した、殊に安井京畿道知事、井上前遞信局長、堀西鮮銀總務、甘蔗京城府尹、矢野總督府事務官を初め府内の名士はスタンドにあつて名選手の美技にしば〳〵拍手を贈つてゐた

試合 は西戰、鐵路を期待された地方勢に武運なく、中央軍に敗れ、優勝戰は本大會に於て二ケ年連續覇權を持つ熊埜御堂、權福仁組と中央代表洪承杰、李鳳基組とで開戰、熊埜御堂、權組の完璧陣に流石の鬪將洪、李組の善戰も空しく、熊埜御堂、權組は本大會初つて以來の記錄である三ケ年連續覇權を獲得、安井知事から優勝盃を贈られた、かくて午後六時榮えある本大會の幕は閉ぢた

準決勝戰

選手權保持者(熊埜御堂 權福仁) — 中央推薦(洪承武 朴龍善)

1—4
4—1
4—6
1—4
4—6
1—4

熊埜御堂、權福仁組は名實ともに日本一の名選手、これに向つた殖銀軍の大將洪承武、朴龍善組も全日本のベスト五にシードされる强豪、スタンドからは鯨波の如き拍手が起る、和栗審判の宣言で激戰は洪選手のサーブで開始、試合前半は洪選手日頃とは打つて變つたアタック・ボールで熊選手の逆を攻め、熊埜御堂選手を苦しめたが、日本選手權保持者の貫禄は泰山の如く搖るがず、後半戰に入るや天下に後衞戰のラリーは展開、觀衆は手に汗を握つてファインプレイをヂツト見詰めてゐる、年の異名ある名前衞朴選手がキ字に動けば、熊埜御堂選手の神技に近きストロークは敵陣深く喰ひ込み、當りをとり戻した權選手の手榴彈の樣なスマッシングの連發に洪、朴組遂に四——一で恨みをのんだが、球界稀れに見る堂々たる大試合であつた

中央代表(洪承杰 李鳳基) — 中央推薦(殷秉律 渡邊)

1—4
0—4
4—6
6—4
7—5
6—4
6—4
2—4
5—3
2—4
3—5
5—6

全身鬪志の洪選手タンク戰法で突擊、殷、渡邊組をゲーム・カウント三——〇のボール・カウントで二——一まで追ひ込み、完全に止めを刺したと思つたが、殷選手飽までも試合を捨てず、グン〳〵と盛り返し三——三となつたさらにゲームはシー・ソー・ゲームとなり、兩組とも汗まみれとなつて惡戰苦鬪の結果、本大會初めての五對五の大接戰となつた、更にボール・カウントは三——三と行く所まで行き、遂に李前衞のボーレ決まつてゲーム・セット、所要時間實に一時間五分、思ふ存分戰つた兩組選手にスタンドから『有難う』の聲が起つた、かくして洪、李組は善戰又善戰を續けて榮えある優勝戰に臨み、二ケ年連覇を續ける熊埜御堂、權組と雌雄を決することになつた

優勝戰

選手權保持者(熊埜御堂 權輻仁) — 中央代表(洪承杰 李鳳基)

1—4
6—8
3—5
4—1
3—6
1—4

評 洪選手準決勝戰で疲れたが、決勝戰ではタンク强の打法功を奏せず、熊埜御堂、權組前にもろくも破れた

三年連捷の榮譽 優勝した熊埜御堂、權輻仁組

軟式野球

京城豫選成績

京城軟式野球聯盟主催、第一回全鮮都市對抗中央豫選は十二日午前九時半から京城、龍山兩球場で行はれた、參加十二チームはそれぞれ京城球場で入場式を行ひ、井上西長の始球式で爭覇の火蓋を切つた、第一回戰の成績次の通り

遞信本社	3	0	0	0	0	0	2	0	0	6A—5
京電	1	0	3	1	0	0	0	0	1	
明治商事	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2—0
丸星支店	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
專賣支局	0	2	1	5	1	0	0			5—9
双葉倶	2	0	0	0	3	0	0			
錦城倶	0	0	0	0	0	0	0			7—0
早稻倶	0	3	0	3	0	1	0			

明大の猛者團 二度目の渡米

オリンピック代表軍が歐洲で活躍するなら、こちらはアメリカで國技の粹、柔道の眞價を發揮しようと、夏休みを利用した明大柔道部の米國遠征團が十日華やかに出發した、今回は二回目の米國遠征で、築山三郎範士に引率され、山田忠雄マネージャー以下五段の顔觸れ、宮川周藏、岩崎郁男、城戸勝守、三國彦夫、四段大神正文、小野留一、落合秀明、坂本清、藤岡重夫の諸君、猛者揃ひで、十日午後零時半東京驛發同三時横濱出帆の淺間丸で出發、桑港で日本總領事館主催の歡迎會及び米國柔道軍との模範試合を皮切りに約四十日に亙つて各地に第二世の爲に講習、ナチラの天狗との敵戰を經へて九月二十八日に歸朝の豫定である

本紙一萬號記念懸賞小說二等當選　禁無斷上演映畫

春を待つもの (66)

山下ハル子

寺本忠雄畫

迷路（七）

『宗像？高麗嶺山の宗像か？』

父親が何氣なく女中に聞き返してゐる言葉に夏繪は激しい衝動を受けた。

『はあ、あの何でございますか、今朝の汽車でお着きになつたのだとか仰つしやいまして……』

『うむ、解つた。間もなく參りますと云つといて呉れ……』

女中が下つて行くと、又一しきり新聞をカサ／＼いはせてゐたが夏繪には何も話しかけなかつた。

彼女は、音のしないやうに着物を着替へて前側を匿んで座敷の隅に重ねると、襖越しに父親に聲をかけた。

『もうお出掛ですの？』

『あゝ――』

父親の穩かな聲を聞いてゐると夏繪は、宗像といふ名前を聞いた丈で、自分を失つてしまつた氣持が恥しくなつたが、心の底にはその高嶺を越ゆる激しいものが動いてゐた。

『宗像さんて京城の方ですか？』

『あ、あ、逢ふ――』父親は何か他のことに氣を取られてゐるらしく曖昧な返事をした。

『お父さんの心易い方ですの？』

『心易いと云ふ譯でもないが、どうかしたのかい？』

『いゝえ、別に――』夏繪は急所を衝かれて默り込んでしまつた。

黒い鐵縁の眼鏡をかけた男の顔の記憶を辿つて、何かまだ尋ねてみたかつたが、適當な言が浮かんで來なかつた。

『お忙しいんでしよ？』

『うむ。去年邊りから見れば大分違いつて來たが、たいしたこともない。』

『でも、朝からお客樣が待つてゐらつしやるやうじや……。』

『お客と云つたつて金にならん客では同じことだ。今日來たと云ふ人間だつて鑛山を賣りたい方の側で來てるから仕方なく逢ふやうなものだ……。』

『遠くの方の方ですか？』

『うん。馬山の近くに銀山の小さいのを持つてゐるんだ。もう古株なんだが最近金に詰まつたらしく頻りに賣りたがつて話を持ち込んで來るんだが、どうも……』

『じや、もうずつと前から此方にゐらつしやる方なんですか？』

『さうだね、かれこれ四十年近くなるやうな口吻だつたなあ……』

夏繪は氣負つてゐた氣持が緩んで行くのを、冷い氣持で見守つてゐた。

父親が、出て行くと彼女は、獨りで、敎へられた途を山へ向いて辿つて行つた。

赤土の切通しの山道の上には、松の茂みが黒い木蔭を作つて、萱や齒朶のやうな雜草がその蔭に群がつてゐた。

彼女は、汗ばんだ顔を松の木蔭に運んで行つた。單調な白足袋に草の葉が觸れかゝり、山苔を踏んで細い道をずん／＼奧の方へ歩いてゐると、二股になつた分れ道へ出た。

急に長い途を歩いた故か、眩暈して暫くじつと目を閉ぢてゐた。

元來た途へ引返しながら、こんな生活が此の後どの位續くのかと思つてゐた。

それは暗い氣持だつた。

裏口の通用門から入つて、勝手元で山鳩團の折つて來たのを瓶に差してゐると、女中が出て來て、

『あ、お歸りですか。あのう』

『なあに？』タオルで手を拭き拭き云つた。

『本屋が參つてゐますが、どう致しませうか？』

『何か持つて來たの！』

『いゝえ。大津居號で紹介されたさうで、古い本を拂下げて頂きたいなんて申してゐますが』

『さう、でもお父さんがゐらつしやらないと……』

『じや、さう申して斷りませうか？』

『それも惡いねえ。玄關で待つてゐるの？』

『はあ――。』

『じや私が一寸逢つてみますわ。』

JODK

十三日番組（月曜日）

第一放送

午前六時（東）ラヂオ體操

同六時三〇分（京）英語講座（五の二）　山本修二

同七時　今日の天氣見込

同七時一分（京）朝の修養講座　伊藤道海

同八時（東）孟蘭盆會法要＝浄土宗大本山増上寺より中繼＝（一）　導師　大本山増上寺法主　六僧正　大島徹水　副導師　金子全應　同　渡邊眞海　外　一山大衆

同九時（東）家庭メモ

同九時一〇分　氣象通報（釜山）

同九時一五分　氣象通報・料理獻立

同一〇時三〇分　家庭講座　お盆と孝道　本派本願寺開敎總長　後藤澄心

正午（東）時報・日用品値段・鮮魚相場値段

午後零時五分（東）輕音樂　PCL管絃樂團　指揮　紙恭輔

同零時三五分（東）國民歌謠（第一日）

同零時四〇分　ニュース

同一時（東）婦人講座　短歌と俳句の味ひ方作り方（六）　水原秋櫻子

同二時五〇分（大）野球試合實況（京城・第二放送）日本職業野球選手權野球大會＝甲子園野球場より中繼＝

同三時四〇分（東）氣象通報

同四時　ニュース（氣象通報・釜山）

同六時（福）ラヂオスケッチ　博多山笠　福岡放送童話研究會

同六時二〇分（東）コドモの新聞　村岡花子

同六時二五分（東）基礎英語講座（三十九）　鹽谷榮

同六時五五分（東）カレントトピックス

同七時　ニュース・天氣見込・聽樂紹介

同七時三〇分　講演＝京城より全國中繼＝　朝鮮信使の觀たる德川吉宗　文學博士　稻葉君山

同八時（東）新内　梅雨衣醉月情話（花井お梅道行川岸の段）　淨瑠璃　富士松東椽　同　富士松富士太夫　同　富士松佐和太夫　三味線　富士松榮朝　上調子　富士松・東中

同八時二五分（大）ラヂオコント（ピーター・デイクスン作）　譯並演出　豐岡佐一郎

一、三行廣告　案内係　毛利菊枝　彼　山口俊雄　彼女　斐令子　質屋の主人　古川利隆　アパートの主婦　竹内逸子　二、大根役者とヒロイン　役者　山口俊雄　其の妻　毛利菊枝　狂人　古川利隆

同八時四五分（大）歡喜曲＝桃谷演奏所より中繼＝　一、興安の華　二、三人吉三の唄　三、浪の漁火　四、細君三日天下　五、白浪五人男　伴奏　ナイチンゲール　美ち奴

同九時（東）管絃樂　指揮　杉田良三　組曲「アルプスの風景」マスネー作曲（イ）日曜日の朝（ロ）キャバレーにて（ハ）菩提樹の下（ニ）日曜日の夕　日本放送交響樂團　指揮　ニコライ・シフェルブラット

同九時三〇分（東）時報　ニュース・氣象通報・翌日の番組（地方へのニュース・レコード音樂・京城）

同一〇時　ニュース・氣象通報　地方へのニュース・（朝鮮語・釜山）

第二放送

午後零時〇五分（東）輕音樂　ハーモニカ合奏　ヤマハバンド

同六時三〇分

同七時　經濟解說　李常薰

同八時　農村講座（一）朴　晋日

同八時三〇分　小唄・番外　郭山月

同九時（東）管絃樂

同九時三〇分　野談　申　鼎　言

十四日きゝ物

午前七時一分（東）朝の修養　碧巖

講演（全國中繼）後七時半

朝鮮信使の觀たる德川吉宗

朝鮮總督府修史官文學博士　稻葉君山

稻葉博士は本名岩吉、既に拜朝鮮より朝鮮及滿洲の歴史を深く究め現に朝鮮史編修會主席修史官たると共に幾多の著書を世に出してゐる斯學の泰斗である

德川家康が朝鮮との國交を回復しから朝鮮通信使は將軍の襲位毎に内地に往來し幕府二百五十年間に前後十二回に達し各々その見聞を書きのこしてゐるが就中八代將軍吉宗に關する記事は最も明朗であつて、吉宗の人物の卓越してゐたことは當時から朝鮮には知られてゐたのである、之を中心として前後の内鮮關係を述べてみたい

家庭講座（前十時半）

お盆と孝道

本願寺開敎總長　後藤澄信

佛敎　けふは「盆の十三日」であります、が日本に渡來してから一千三百餘年になる今日迄…

…〔正月三日に盂蘭盆を初めて〕…その父母を始めその祖先を…る行事は…七月十五日…形をつくつて盂蘭盆會を…かせられ、其の後聖武天皇の天平五年七月には盂蘭盆供養を宮中に…かせられ、且つ天下に令して七月…

我等　が眞實に三世を貫く佛敎精神に生きるならば現に父母在します在しまさぬに拘らず孝行は出來るものであることを、お盆の行事から内省して『孝行をしたい時分に親はなし』といふやうな言葉をせんでよい百行の本たる孝道を全うしたいと思ひます

當代一流爭霸血戰譜（11）

（中村氏二回戰三八目）

平香交　四段　▼中村熊治

平手番　四段　▽鈴木禎一

四局

圖は七二金迄の局面

〔持駒〕▽鈴木氏　角

▼六五步（8分）▽六二銀（12分）▼七六銀（24分）▽九四步（13分）▼八五步　▽同步　▼同銀（12分）▽九一桂

消費時間各七時間　消費時間▼二時間二十三分　▽二時間八分

觀戰記（四）

双龍子

局面は重いながらも中村四段が七二金と敵銀に備へたところまで今日は鈴木四段の手番、同氏としては八筋より攻勢を採る必要上どうしても敵馬の利きが邪魔になる目障りなので直ちにこれを追つ拂ふ計畫を樹てた

それが六五步、暫く突き出して位を取り馬筋を留め、以て銀の出動を命じやうとするのだ

續いて七六銀の時四六步、三四銀、四七金と組む手を考へましたと云つてゐるが敵は今迄玉攻めるに越したことはあるまい

これに對し中村四段は九四步だが、最初の作戰は、ここで八三金と上り敵が八五步に對し同步、同銀、八四步と打ち、次に七四步突きで交換、敵がもし八五步と突いて來れば九三桂と跳ねていいと云ふ肝だつたとの事

しかし、ここは何と云つても八三金と上つて指すのは正當の應戰である

鈴木四段が事更まぎらはしい面倒な八五步を採つたのは、敵に四二玉と上られる手を懸念した作戰である

それならどんな筋かと云へば八五步の時同步、同銀、その時九三桂と跳ね出されるのが嫌だと云ふのだ

講評

八段　金易二郎

鈴木君は强敵を向ふにし、些かの油斷もなく作戰に陣型の隙を作らず六、七筋を利かし敵の布陣を壓迫し最善の駒組を布いたのは好ましい次第である

この時中村君が九四步と指したのは、少くとも敵の攻勢力に桂を利用し輕く淺く性であらうが、敵の八三步打ちの好手を見落したのは考へ違ひである

こゝは八三金、八五步、同步、同飛、八四步、八九飛、四二玉以下雇玉の危險を避けるべく工作必要のところである

二筋に安全地帶がある

ラヂオスケッチ

（夕六時・福岡より）

博多山笠

福岡放送童話研究會

◇――**博多**　祇園祭は七月一日から十五日まで一日の追山を最高潮として華やかに…の『祇園おろし』を序曲として…このお祭は頗分古くから行はれたもので五百年昔の『九州軍記』といふ本に初めて書かれてありますがその起源はもつと／＼古いのです

◇――**貝原**　益軒先生は元祿時代の山笠に就て『山笠に大なる作り山を舁入博多津中を舁き廻して歩…

管絃樂（九時）

指揮　ニコライ・シフェルブラット

組曲「アルプスの風景」

マスネー作曲

（イ）日曜日の朝…（ロ）キャバレーにて…（ハ）菩提樹の下…

大阪商船出帆

朝鮮郵船出帆

朝鮮汽船株式會社

大阪商船株式會社京城出張所

國際運輸會社